エッセイ

# 古典に見えるカッコウ

水谷　智洋

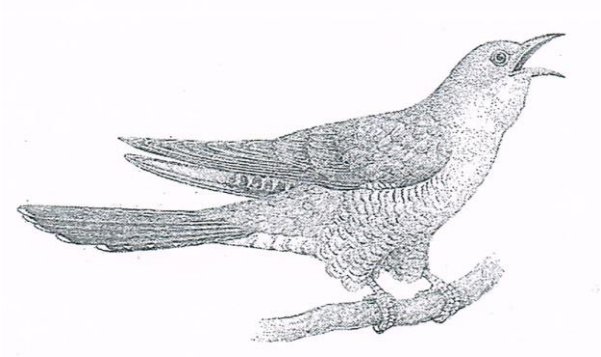
今年の 3 月頃、私は、そこいら中に散乱しているメモ、カードの類を少しはなんとかしよう、と殊勝な考えをおこしました。すると思いがけず、カッコウに言及した 2 枚のカードが見つかりました。1 枚は金田一春彦『ことばの歳時記』（新潮文庫、1973、186 頁）の 6 月 3 日の条のカードです。この記事は、もともと、1965 年 1 月から 12 月にかけて東京新聞と中部日本新聞に、同名のタイトルで連載されたコラムなのですが、6 月 3 日の分に「東京も小金井（こがねい）近郊まで出ると毎朝その声を聞くことができる」との字句があり、それが当の小金井在住の私の目をとらえたのでしょう、わざわざコピーしてカード化する労をとったものと思われます。もう 1 枚は私の手書きのメモです。「① 1996.6.16（日）夕方 5 時、小金井公園でカッコウの鳴き声を聞く。② 1996.6.19（水）午前、家にいて公園の方からカッコウの鳴き声を聞く。」とあります。これは金田一氏の文章に刺激された私の走り書きに違いありません。ですが、カッコウの鳴き声を聞いたというメモは、この 1 枚しか見つかりませんでした。ということは、1996 年 6 月以降は、聞いてもメモしなかったか、あるいはカッコウの小金井への来訪は絶えたかです[1)]。

1965 年当時の小金井を私は知りませんが、御多分にもれず、当地からも緑は確実に減っていますし、反比例して人口は増えていますから、現在の「小金井近郊」は、残念ながら、もはやカッコウの生息できる環境ではなくなったというのが、実情ではないかと危惧されます。この点は、当地の自然観察グループにでも問い合わせてみる必要がありますが、それはさておき、私は今回、ほぼ 20 年ぶりにカッコウのカードが発掘されたのもなにかの啓示、と勝手に解釈し

て、古典文献にこの鳥の記事を探してみようと思い立ちました。以下はその御報告ですが、まずは、『大百科事典』（平凡社、1984）中の樋口広芳氏によるカッコウの説明（404 頁）の前半と成鳥の図（405 頁）を掲げておきます。

カッコウ　郭公

Common cuckoo: *Cuculus canorus*



ホトトギス目ホトトギス科の鳥。托卵（たくらん）性の鳥としてもっともよく知られている。全長約 33cm、体上面と胸は灰色、腹は白地に黒帯がある。…アジア、ヨーロッパ、アフリカに広く分布し、日本では北海道から九州までの各地で繁殖する。秋・冬季には温暖な地方へ渡っていって越冬する。日本では代表的な夏鳥。明るい林から低木の散在する草原までの開けた環境にすみ、雄はこずえでカッコー、カッコーと大きなよく通る声で鳴く。…日本でこの声が聞かれるようになるのは、5 月 20 日前後である

上記の学名により、カッコウのラテン語名は cuculus（第 2 音節の u は長音）と判明しますが、ラテン語の辞書で cuculus を引けば、ギリシア語名は κόκκυξ と容易に知ることができます。ついでに、イタリア語は cuculo、フランス語 coucou、ドイツ語 Kuckuck、いずれも onomatopoeia です。なお、私は鳥類にも暗い一介の語学屋にすぎませんので、本稿の多くは John Pollard, *Birds in Greek Life and Myth* (Thames and Hudson, London, 1977) に負っていること、また、古代人のカッコウへの言及を余すところなく再録するものではないことをも、予めお断りしておきます。

（1）Hēsiodos, *Erga kai Hēmerai*　486-8

ἦμος κόκκυξ κοκκύζει δρυὸς ἐν πετάλοισιν
τὸ πρῶτον, τέρπει δὲ βροτοὺς ἐπ᾽ ἀπείρονα γαῖαν,
τῆμος Ζεὺς ὕοι τρίτῳ ἤματι μηδ᾽ ἀπολήγοι,
カッコウがオークの葉のあいだで、初めてカッコーと鳴き、
はてしない地上の人間どもを喜ばせるとき、

その３日目にゼウスが雨を降らせ、止ませられませんように、

前 700 年頃、ボイオーティアー地方のアスクラ Askra に居住した叙事詩人ヘーシオドスの『農事と暦』486 が、κόκκυξ の出る最古のギリシア語文献です。ここで、カッコウの初鳴きが聞かれるのは、G. M. Most によれば ‘in March’ (*Hesiod, I* (The Loeb Classical Library, 2000), p.127) の由ですから、カッコウは春の訪れを告げる渡り鳥ということが確かめられます。しかし、カッコウの初鳴きはボイオーティアーの農夫たちに対して直ちに何事かを指示するものではなく、「種まきが遅れた者は（これを機に種まきすれば）早くすませた者に追いつけるだろう」（490）と、念を押す程度のことのようです。なお、486 で、普通、鳥が「鳴く、歌う」に用いられる ἀείδω ではなく、κοκκύζω などという denominative verb が使われているのは、M. L. West の指摘のように、 ‘the spondees give an oracular solemnity’ (*Hesiod: Works and Days*, Oxford, 1978, p.281)という効果を狙っているのかもしれません。

（2）Anakreōn　*P.M.G.* 437 [2)]

*Etymologicum Gudianum*

κόκκυξ· ὄρνεον ἐαρινὸν παραπλήσιον ἱέρακι·

ἢ ὄρνεον δειλότατον, ὡς Ἀνακρέων φησίν·

　ἐγὼ δ’ ἀπ’ αὐτῆς †φεύγω† ὥστε κόκκυξ.

カッコウ：春の鳥、大きさはタカに近い。また、きわめて卑怯な鳥、

アナクレオーンがこう歌っているように。

　わたしは彼女から†逃げる†、さながらカッコウさ。

これは、11 世紀の辞書に引用されている前 6 世紀半ば頃の抒情詩人アナクレオーンの詩の断片です。カッコウの大きさをタカと比べるのは後にも出てきますが、「卑怯」というのは、この鳥の托卵行動を指しているのでしょうか。

（3）Pausanias, *Periēgēsis tēs Hellados* (lat. *Descriptio Graeciae*) 2.17.4

ヘーラーの巨大な神像が玉座を占めている。それは黄金と象牙を用いた像で、ポリュクレイトスの作である。女神は頭上にカリテス（優雅の女神たち）とホーライ（季節の女神たち）が細工された冠をいただき、手には、一方にザ

クロの実を、他方には王笏を持っている。そこでザクロであるが、これはみだりに口外してはならない性質のものであるから、私は筆を控える。笏にはカッコウがとまっている。これには次のような話が伝わっている。ゼウスはまだ乙女の頃のヘーラーに恋心を抱いたとき、この鳥に姿を変えた、するとヘーラーはそれをペットにしようとしてつかまえた、と。この話や神々に関する同様の伝承は、私はそれを信じている訳ではないけれども、それでも書き留めておく。

これは 2 世紀半ば頃、地中海世界を広く旅して著述したパウサニアースの『ギリシア案内記』の一節で、アルゴスのヘーラー神殿 Hēraion (lat. Haraeum) の本尊を描写しています。前 5 世紀の高名な彫刻家 Polykleitos (lat. Polyclitus) 作の女神像は、むろん、現存しませんが、大神ゼウスの后である権高なヘーラーが、カッコウとなんらかのかかわりを持っていたことが知られます。また、ゼウスはただ気まぐれにカッコウに変身したのではなく、この鳥とヘーラーとの関係を承知していたうえで、そうしたのであれば、ますますそのかかわり合いに興味をそそられますが、この問題に満足すべき答えを出した研究者はまだいないようです。

（4）テオクリトス『牧歌』15.64 への古注

ゼウスはヘーラーをわが物とせんがために、カッコウに姿を変え、Thornax（または Thronax：アルゴリスの山）の近くで彼女を待ち伏せした。それから嵐を起こした。女神はずぶぬれになった鳥を哀れんで、自らのふところに入れて暖めてやろうとした。そのときゼウスは、彼女の恩にむくいるに手籠めをもってした。

Theokritos（前 3 世紀前半）はシケリアー島のシュラークーサイ出身で、Bukolica (lat. Bucolica)「牧歌」を創造した高名な詩人です。上記はその第 15 歌 Συρακόσιαι ἢ Ἀδωνιάζουσαι「シュラークーサイの女ども、またはアドーニス祭を祝う女ども」64 πάντα γυναῖκες ἴσαντι, καὶ ὡς Ζεὺς ἀγάγεθ’ Ἥραν.「女どもは何でも知っているよ、ゼウスがどうやってヘーラーを妻にしたかさえもね。」への scholia です。ここでは、（3）のそっけない伝承に比べると、びしょぬれの鳥に変身して女神の同情を買おうというゼウスの作戦に新味が出ています。また、具体的にアルゴリス

の山名が挙げられていることは、ヘーラーとカッコウの結びつきがこの地方に根ざした伝承でろうことを示すように思われます。なお、ゼウスとヘーラーのそもそもの馴れ初めを『イーリアス』14.295-6 はこう語っています。ὅτε πρῶτόν περ ἐμισγέθην φιλότητι / εἰς εὐνὴν φοιτῶντε φίλους λήθοντε τοκῆας,「はじめて二人が、いとしい両親の目をぬすんで閨に入り、愛に結ばれたときのように。」どうやら両神は相思相愛の間柄であったようですから、これではカッコウなど「お呼びじゃない」ですね。（私は、今回、（4）の古注のギリシア語のテキストを見られませんでしたので、Pollard の英文（p.160）を訳しておきました。）

（5）Aristophanēs, *Akharnēs* 598

ΛΑΜ. ἐχειροτόνησαν γάρ με —
ΔΙΚ. κόκκυγές γε τρεῖς.
ラーマコス　［誇らしげに］わしは皆から選挙されたのだからな。
ディカイオポリス　三羽の郭公鳥によってな。[3)]

アッティカ古喜劇の大詩人アリストパネースの『アカルナイの人々』（前 425 年のレーナイア祭 Lēnaia で優勝）中の 1 行です。 前 435 年頃、将軍 stratēgos の一人に選ばれた好戦的なラーマコスの自負に対して、和平論者のディカイオポリスが、あれはいかがわしい選挙だった、といちゃもんをつけています。それでは、「三羽の郭公鳥」とは何を意味するのでしょうか。村川注（41 頁）は、「三羽というのは彼の選挙がもちろん三人によって行われたのではないが、市民に大きな関心を起こさなかった、の意味であろう。」としています。しかし、民会 ekklēsia での将軍の選挙がアテーナイ市民の関心を牽かなかったとは思われません。ここは、5 世紀頃の Ἡσύχιος (lat. Hesychius)の記す κόκκυγες˙ ἐπὶ ὑπονοηθέντων πλείονων εἶναι καὶ ὀλίγων ὄντων を参考にした *L-S-J s.v.* κόκκυξ の ‘three fellows who voted over and over again’ という解釈が適当と判断されます。カッコウがうるさく鳴きつづけると、たとえ 3 羽しかいなくても、あたり一面に多数のカッコウがいるかのように聞こえる、それと同じで、ラーマコスの少数の熱烈な支持者が執拗に声をあげつづけて、議場全体を支配してしまったといったところではないでしょうか。

（6）Aristophanēs, *Ornithes* 504-7

ΠΕΙ. Αἰγύπτου δ’ αὖ καὶ Φοινίκης πάσης κόκκυξ βασιλεὺς ἦν·
χὠπόθ’ ὁ κόκκυξ εἴποι “κόκκυ,” τότε γ’ οἱ Φοίνικες ἅπαντες 505
τοὺς πυροὺς ἂν καὶ τὰς κριθὰς ἐν τοῖς πεδίοις ἐθέριζον.
ΕΥ. τοῦτ’ ἄρ’ ἐκεῖν’ ἦν τοὔπος ἀληθῶς· “κόκκυ· ψωλοὶ πεδίονδε.”

ペイステタイロス　さらにまたエジプトやポイニキアじゅうの統治者は郭公だった。そこで郭公が「かっこう」って鳴くと、ポイニキアの人たちは皆畠にある小麦や大麦をとりいれるのがきまりなんだ。

エウエルピデース　ふん、そいでこそあの諺が読めたね、「かっこう、畠へ出ろ、坊主頭め」

上は『鳥』（前 414 年のデュオニューシア祭 Dionysia で 2 等）中の 4 行です。この喜劇はファンタジーの世界で遊ぶものですから、エジプトやポイニキア云々は素通りします。それより私たちの注意は、中年のアテーナイ市民エウエルピデースのセリフにある「かっこう（κόκκυ：鳴き声）、畠へ出ろ、坊主頭め」という諺に向けられます。これには、こういう呉注（244 頁）があります。「アッティカの田舎で流行した文句という、郭公が鳴くと悪戯好きな若者らを仕事に引き出すのが面白い、坊主頭とはセム人等の風習で割礼を施すのを卑猥に解したもの。」「坊主頭」はいかにも呉先生らしいお上品な表現です。私なら Plutos『福の神』267 の ψωλόν を「むけまら」とされた村川先生の訳語を採って、「カッコー、畠へ出ろ、むけマラどもめ」としたいところです。それはともかく、カッコウの鳴き声は、少なくともアッティカの田舎では農事暦の一部をなしていて、血気さかんな若者たちを野良仕事に駆り立てる力をもっていたと考えられましょう。

ところで、κοκκύζω「カッコウがカッコーと鳴く」という動詞が（1）に出ていましたが、アリストパネース *Batrakhoi* (lat. *Ranae*)『蛙』（前 405 年にレーナイア祭で優勝）1380 にもこれが使われています。ΔΙ. καὶ μὴ μεθῆσθον, πρὶν ἂν ἐγὼ σφῷν κοκκύσω.（デュオニューソスがアイスキュロスとエウリーピデースに）「おれが「郭公」というまで二人とも放すな」（高津春繁訳）。酒神がしっかりつかんでいろと命ずるのは、天秤の皿 πλάστιγξ です。2 人の詩人に詩句を誦させ、どちらの皿が下がるか、試してみようというのです。そして 2 人が得意の詩句を 1 行ずつ誦すると、神は κόκκυ, μεθεῖτε·「カッコウ！放せ。」（1384）といい、アイスキュロスの皿が下がったのを確かめるという運びです。日本語なら「よし、

放せ。」というところの「よし」の代わりに「カッコー」を持ってきたのは、おそらく、喜劇詩人のおふざけにすぎないでしょう。κοκκύζω はもう一度、同じ作者の *Ekklēsiazusai*『女の議会』（たぶん前 392 年）に見られます。δεύτερον κεκκόκυκεν (31) がそれで、ここでは「鳴いた」のはカッコウではなく、オンドリのようです。*L-S-J s.v.* κοκκύζω には‘II. *cry like a cuckoo or cock, give a signal by such cry*’とありますから、「（オンドリが）二度目のときをつくった」（村川堅太郎訳）が適訳です。それにしても、古代ギリシア人の耳には、「カッコー」と「コケコッコー」が同じように聞こえたのでしょうか。不思議です。

（7）Platōn, *Laios* fr.65 [4)]

οὐχ ὁρᾷς ὅτι
ὁ μὲν Λέαγρος Γλαύκωνος ὢν μεγάλου γένους,
< ἀβελτερο > κόκκυξ ἠλίθιος περιέρχεται
σικυοῦ πέπονος εὐνουχίου κνήμας ἔχων ;
君は知らないのか、
偉大なグラウコーン一族出のレアグロス、
愚かで怠け者のカッコウがうろつきまわっているのを、
種なしキュウリのような脛をして。

このプラトーンはかの高名な哲学者ではなく、アリストパネースとほぼ同時代の喜劇詩人で、上記は、アテーナイオス Athēnaios（2～3 世紀）*Deipnosophistai*『食卓の賢者たち』2.68C に引用されている断片です。題名の「ラーイオス」は、むろん、オイデュプースの父。I. C. Storey によれば、前 390 年代の末頃から 380 年代の初め頃の作と考えられる由です。そのストーリーは皆目不明ですが、私たちの興味はそれよりも、実在したらしい、かつ裕福で名家の一員であったらしいレアグロスなる人物が「愚か（< ἀβελτερο > は Bergk の補い）で怠け者のカッコウ」呼ばわりされていることに向けられます。どうやら、カッコウは悪口の材料になり下がってしまったようです。

次にはアリストテレース『動物誌』という大物が控えていますが、つづきは次号に。

# 注

1) 東京に不案内な方のために一言しますと、JR 武蔵小金井駅は新宿駅から中央線で真西へピッタリ 20km の地点にあります。また小金井公園は、小金井、小平（こだいら）、西東京（にしとうきょう）、武蔵野の 4 市にまたがる広大な公園で、東京ドームが約 17 個入る由です。
2) 断片番号は D. Page (ed.), *Poetae Melici Graeci* (Oxford, 1962) のそれです。D. A. Campbell, *Greek Lyric, II* (The Loeb Classical Library, 1988) も同じ番号を使っています。
3) アリストパネースの訳文はすべて『世界古典文学全集 12 アリストパネス』（筑摩書房、1964）所収のものです。（5）は村川堅太郎訳、（6）は呉茂一訳。
4) この断片については、I. C. Storey, *Fragments of Old Comedy, III* (The Loeb Classical Library, 2011), pp.118-21 を参考にしています。